

## 審 議 結 果 (案)

次の審議会等を下記のとおり開催した。

審議会等名称	第13期第4回神奈川県生涯学習審議会		
開催日時	平成29年11月10日(金) 10時00分～12時00分		
開催場所	横浜開港記念会館 1号室		
出席者	青木信二、有賀かおる、宇野努、大田裕多佳、小沼徹、小野寺智美、小池茂子 (○)、小林英子、鈴木眞理(◎)、田中信次、天井勝海、夏井美幸、野崎智、萩原建次郎 ※五十音順(◎は会長、○は副会長)		
次回開催予定日	平成30年1月19日(金曜日)		
問い合わせ先	所属名、担当者名	教育局生涯学習課	森、白川、廣瀬
	電話番号	(045) 210-8342	
	ファックス番号	(045) 210-8939	
下記に掲載するもの	○・議事録全文 ・議事録要約	要約した理由	

## 1 開会&lt;事務局&gt;

## 2 あいさつ&lt;生涯学習部長&gt;

(傍聴者確認)

## ○鈴木会長

審議に入る前に、本会議は原則公開となっておりますが、傍聴を希望する方はいらっしゃいますか。

## ○事務局

傍聴を希望する方はいらっしゃいません。

## 3 議題

(1) 第13期生涯学習審議会諮問事項「地域と学校の連携・協働の推進」について

## ○鈴木会長

最初に、前回までの審議の概要について、事務局から報告願います。

## ○事務局

「資料1」により御説明いたします。第1、2回の内容については前回との重複となりますので資料を御覧いただくこととし、第3回の内容について主な発言等を御紹介いたします。

第3回審議会の内容は、「地域と学校の連携・協働」に関わる取組として2事例の紹介および、今後の審議会の運営についてでした。今後の審議会の運営については、部会を設置しないこと、委員の皆様レポートの作成をお願いすることについて御了解いただきました。取組事例については、主な御発言を御紹介します。

まず、「小田原市放課後子ども教室」について前回の補足がありました。

・学習支援における、学校で教えているものと、附属しているところで教えているものとの関係ですが、これは、教育委員会教育総務課の責任において行われているとのこと。また、コーディネーターの位置づけですが、地域の立場として位置づけられると思われ。

次に、南足柄市「地域学校支援事業」南足柄中学校における取組についての主な御発言です。

・学校支援ボランティアの導入によって、子どもたちにとっては、多様な体験や経験の機会を増やす、学校にとっては、開かれた学校を実現し活性化につながる、家庭・地域にとっては、生きがいづくりや自己実現が図られる、といった効果があります。

・課題として、「学校からの学校支援ボランティア要請が毎年少ない傾向がある」という点があります。これには、2つの要因が考えられます。1点目は、毎年同じボランティアに来ていただく形で定着しているため、新たなボランティアを開拓する必要があまりないこと。2点目は、授業支援ボランティアになかなか入っていただけないことがあります。授業支援ボランティアは、技術科などの専門的な授業に関わってもらうことが多いため、ボランティアを増やすことが難しいのが現状です。一方で、楽しく作業できるものには、ボランティアが多く集まります。ボランティアがやりがいを感じ、やってよかったなと思わないと、継続していくのは難しいと思います。

・ただし、得意分野を活かしたい方はいるので、それを教員のニーズとマッチングできると授業支援にももっとボランティアに入っていただけるのではないかと思います。

・ボランティアが成功する要因は2点あると考えています。1点目は、ボランティアがやりがいを感じる。2点目は、ボランティアに入っていただくことが子どもたちのためになった、と教員が感じる。ことだと思えます。

・中学校ではコーディネーターが2名体制となっているため引継ぎがスムーズに行われていますが、幼稚園はそこまで体制が整っておらず、引継ぎが課題となっています。

・市全体の小学校同士、中学校同士の横の繋がりとなるコーディネーター連絡会への要望があります。

・この事業は“連携”がなにより重要ですが、コーディネーターのやる気で連携が進みつつあると感じています。

・南足柄市の事業は、開始時期を見ると、文科省の学校支援地域本部の施策（※）が始まった時期とほぼ重なります。（※平成 20 年度から実施）

次に、藤沢市「学校・家庭・地域連携推進事業（三者連携ふじさわ）」の取組についての主な御発言です。

・中学校区を中心に市内に 15 の協力者会議が置かれています。この組織の目的は、地域課題の討議、地域コミュニティー事業、地域団体との連携事業、地域環境整備事業、学校支援事業、講演会・学習会、推進事業の周知などです。各地域で様々な活動が行われており、その中心となって活動している方々がいらっしゃいますが、コーディネーターという呼び方で委嘱するといったことはしていないことが、一つの特徴といえるかも知れません。

・「三者連携ふじさわ」の事業では、公民館との関わりは、事務局としての関わり以外にはあまり出てこないように思います。ただし、ボランティアを探したいときには、公民館が持っているボランティア名簿を参考にさせてもらうなどのつながりがあります。

・地域と学校が連携する場合、エリア分けが問題となることがよくあります。藤沢市の場合、協力者会議の区割りは中学校区単位で、事務局が市民センターまたは公民館となっています。行政区と学校区でエリアが異なることによるトラブルなどはないのでしょうか。

・トラブルとまではいかないまでもややこしい問題があります。行政区と学校区が異なる場所に位置する学校では、両方の活動に参加しなくてはならないなどの問題が生じているようです。

・学園都市むつあいの事例を聞いて、小学生と高校生との関わりがとてもいいな、と思いました。身近な方々から話を聞く、自分に近い世代の人の話を聞く機会があるのは、小学生にとってとても参考になると思います。

その他、全体を通じての御発言として、次のようなものがありました。

・（紹介された事例で）公民館がどこにも出てこないのが寂しいと思いました。公民館には社会教育の様々な活動をしている方がいらっしゃり、社会教育関係団体との関わりもあります。地域の拠点となる公民館がコーディネーターの役割をすることもできると思います。様々な人材を持っている公民館を、ぜひもっと活用して欲しいです。

・現在は、地域や NPO 等から様々なプログラムが提供されます。また、子どもたちの現在の状況を見ていると、習い事をたくさんしていたり、学校にも大人がたくさん入って学習支援が行われるなど、常に、真夏の太陽の日差しのもとで、どこにも隠れる場所がなく大人の視線に晒されています。それが、逆に疲れる状況を生み出していることが心配だ、という指摘を聞いたことがあります。何のために学社が連携するのか、子どもたちにとってどういう環境がよいのか、ということを考えざるを得ない指摘だったと思います。

社会教育は、フォーマルではない学びや活動です。すなわち、意図や計画がなく、生活のなかで偶発的に人と出会ったり経験したりして、自ら体験し、自ら考えて、自ら学んでいく営みが多く含まれているものです。子どもたちにとっても、地域の方にとっても楽しいのは、偶発性にとんだインフォーマルな活動なのではないのでしょうか。そこには、フォーマルな、

“教える”というのとは違った関係性があるから楽しいのではないのでしょうか。

シニア世代と子ども世代の関係性には、「冗談関係」が多く含まれています。つまり猥雑なことや子どもの悪さも冗談として受け流してくれる関係、そういう懐の深い関係、遊びのある関係性があつたほうが、子どもにとっても大人にとっても楽しく、関係が長く続くのではないかと思いました。

#### ○鈴木会長

第3回の内容について何かございますでしょうか。

#### ○鈴木会長

特にないようですので、事例発表に移ります。天井委員と宇野委員から御報告いただきます。まず、天井委員からお願いします。

#### ○天井委員

「事例1 資料」により御説明いたします。9月19日に茅ヶ崎市役所を訪問し取材したものです。取材は、茅ヶ崎市まちぢから協議会の市の担当者、および松林地区まちぢから協議会子ども部会の部会長、副部会長に御対応いただきました。

まちぢから協議会は、市が、活力ある新たな地域づくりやコミュニティづくりを目指して、平成24年度からモデル事業開始、平成28年度から本格実施したもので、現在は、茅ヶ崎市全体で12地区に協議会が設置され、活動しています。

今回取材した松林地区は、JR相模線の東側、国道1号線の北側に広がる、やや内陸寄りの地域です。この地域は、近年、急速に宅地開発が進み、景観や住民構成も大きく変化しています。この松林地区のまちぢから協議会の中に子ども部会があり、主に「おむすび松林」と「ふくろう塾」という事業を実施しています。

「おむすび松林」は、主に子育て支援のねらいのもと、様々な年代の人たちが交流するもので、軽食提供もあわせて行っています。実施は月2回程度、平均20人を超える参加があるなど、活発な活動となっています。若い世代の方々の抱える課題に対する相談窓口となったり、地域住民の方々の絆を深める場となっているようです。

もう一つの事業「ふくろう塾」が、本日の報告のメインとなります。

「ふくろう塾」では、学習支援活動と夕食支援活動の2つの支援活動が行われており、大きなねらいは、子どもたちの第3の居場所をつくることにあります。

活動のきっかけは、公民館周辺で中学生が夜遅くまで集まっているという状況があり、健全育成の観点から、子どもの居場所づくりをどうしたらよいか模索されたことでした。一方、学校側からも、地域の力を活用して何かできないか、という話もあつたようで、平成28年度から本格的に実施されました。平成28年度は、まちぢから協議会の取組を支援するための条例である「茅ヶ崎市地域コミュニティの認定等に関する条例」および施行規則が施行された年で、こういった市の行政的なアプローチや財政支援もあり、本格的な活動が行われるようになったものと思われま

活動のコアメンバーは4～5人ですが、学習支援等のボランティアにより、毎回、10名

前後が携わっています。月2回、18時～20時くらいまで行われ、中学1年生を中心に、平均14～15名の子どもたちが参加しています。学習支援活動は、生徒の自主性、主体性を尊重した個別型の学習を実施。一方、夕食支援活動は、食育の観点から、多くの人たちと楽しく食事する体験が必要ということで、できるだけ家庭的な食事を味わってもらうこと、また、季節の食材や行事にも配慮しているようです。

これらの学習支援活動と夕食支援活動により、楽しい食事と学習で心も満たす、子どもの第3の居場所づくりが行われています。

活動の成果としては、一つに、学校と地域の連携が深まったことがあります。地域と学校が協働して子どもを育てていくという共通の目標に向かって取り組んでいます。また、この事業のきっかけとなった、夜遅くまで公民館周辺に集まっている子どもたちについても、第3の居場所ができたことにより解消してきており、健全育成の観点からも成果が見られます。加えて、地域の大人と子どもたちの交流が生まれ、日常の良好な関係が構築されてきていると思われます。「ふくろう塾」の活動について広報紙も配布しており、活動への理解と関心が深まってきているためか、食材の寄付等も行われるようになってきているようです。

一方、課題もあります。一つは、活動回数増や、対象者に小学生を含めて欲しいなど、規模拡大への要望がありますが、現在の人材では活動の拡大は難しいとのこと。また、学習支援について、指導役となるボランティアの指導方法と事業のねらいとの齟齬なども課題です。また、茅ヶ崎市では、学童保育、子ども食堂、協働推進事業（教育委員会とNPOとが協働で行っている学習支援）なども行われており、これらの事業との連携やネットワーク化も今後の課題ということでした。

取材を通しての感想を「地域と学校の連携・協働」という点からまとめてみたいと思います。

学校側から見た場合、生徒の多様化に伴って、学校が抱える課題の複雑化、困難化が見られるなかで、学校だけで教育を完結するという考え方ではなく、学校が地域に開いて、地域の力を借りながら、地域と学校の連携・協働によって子どもを育てていくことが必要とされていると思いました。「ふくろう塾」への学校側の協力体制には、そういった背景があると思われます。一方、地域から見た場合、地域の大人たちが、地域の子どもたちに積極的かつ組織として関わることによって、地域の教育力が高まっていることが、この活動を通して見られます。また、地域住民の関係から見た場合、この活動を通して、地域の子どもたちと大人との間の絆が深まってきたことがうかがえます。こうしたことから、大人も子どもも学ぶことを通して、新たな地域コミュニティが構築されるという動きとして捉えられるのではないのでしょうか。「ふくろう塾」の活動はまだ始まったばかりですが、新しいコミュニティづくりの芽生えが見られるのではないかと思います。

最後に、この事例は2つのことを提言しているのではないかと考えます。

一つは、これからの地域社会あるいは学校教育にとって「地域と共にある学校」「学校と共にある地域」ということが重要であるということ。そのためには、二つ目として地域と学

校の連携・協働を推進するための組織的、継続的な仕組みづくりが必要であることです。

最後に、取材に協力してくださった茅ヶ崎市の皆さんにお礼を申し上げたいと思います。

○鈴木会長

ありがとうございました。確認したい事項がありますでしょうか。

○青木委員

松林地区というのは、市全体の中で、どういう会になっているのでしょうか。

○天井委員

基本的には連合自治会等のようなものだと思います。市域全体を、市が13の地区に分け、各地区の自治会や、社会福祉協議会、青少年育成推進協議会等の地域の活動団体等を横断的に組織したものです。

○青木委員

そうしますと、公民館とのつながりはどうなっているのでしょうか。

○天井委員

直接のつながりはないようですが、各地区に必ず公民館があり、活動の場所の提供などを行っているようです。

○鈴木会長

それでは続いて、宇野委員から発表をお願いいたします。

○宇野委員

今回、平塚市の金目中学校区の地域教育力ネットワーク協議会が行っている「通学合宿」取材しました。

この報告の前に、皆さんに簡単なアンケートを取りたいと思います。人からもらう花束と自分で買う花束とでは、どちらがうれしいでしょうか。挙手でお願いします。

(自分で買う花束がうれしい人：数人、人からもらう花束がうれしい人：多数)

ここで、人からもらう花束のほうがうれしい人が多い、ということが可視化できました。これを踏まえて、今回の事例報告を行いたいと思います。

平成15年度からスタートした「通学合宿」は、今年で15回目を迎えています。地域と学校の連携・協働に関しての成功例といえるでしょう。今年度は10月29日から10月31日に実施されました。

「通学合宿」の目的は、公民館から小学校に通う2泊3日の生活体験から、子どもの社会性、自主性、協調性を伸ばし、生きる力や思いやりの心を育てることにあります。この通学合宿の担い手の役割と3日間のスケジュール内容を、資料(スライドp2)にまとめました。前回の審議会で、鈴木会長より、社会教育の観点でさまざまな機関が協力している事例が出てくると面白いという指摘がありましたが、この「通学合宿」は7つの機関や団体が連携、協働している事例です。

2泊3日で参加した子どもたちは、さまざまなボランティアの方々と接しながら、共同生活の中で、食事の用意をしたり、施設の掃除をしたり、また、「もらい湯」としてお風呂を

提供してくれるお宅に伺いお風呂に入ったり、そして、その家の住民と交流するなどの体験をします。前回の審議会で萩原委員から、社会教育は生活の中で自ら体験し、考え、学んでいく営み、すなわち、偶発性に富んだインフォーマルな活動であるというお話がありましたが、この「通学合宿」は、まさに、子どもたちにとっても、それを担う大人たちにとっても、フォーマルではない学びの活動といえるものでした。

この「通学合宿」における連携、協働を曼荼羅チャートにしてみたのが、資料（スライド p 3）の表です。企画運営を金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会が担い、平塚市教育委員会は助成金等のバックアップをしています。また、平塚市立金目公民館は場所の提供をするとともに、地域住民が集まる場所であることから、ネットワークをつなげる役割も果たしています。金目小学校とみずほ小学校は、広報と、公民館へ下校する際の安全、見守りを担っています。また、食事準備のフォローやレクリエーションには、地域の団体が協力しています。そして、「もらい湯」や合宿中のお世話係などで、多くの地域住民の方がボランティアとして関わっています。

15 回も継続している事業といえども、初めからうまくいったわけではないことも、取材を通じて分かりました。人間関係や予算など、経験がない分、話し合っただけで知恵を出し合い、今では信頼関係が構築されています。また、継続しているからこそ、ボランティアの意識も高くなり、それを逆に抑制するといったうれしい苦労もあると伺いました。

「通学合宿」の実施後、1～2週間後に「感謝会」を行います。参加した子ども、保護者、ボランティアなど関わった方々から感想を回収し、次年度につなげることが、継続できている一つの要素だと思われます。そしてこの感謝会は、たくさんの効果や気づきの場になっています。

「通学合宿」の本来の目的（スライド p 6）は、地域と学校の連携・協働によって十分に果たされていました。そして、目的以上の副産物がたくさん生み出されていることに気づきました。それが資料（スライド p 7）に記載したものです。「通学合宿」に参加した子どもたちの中に、2泊3日の合宿に参加した達成感や新しい交流関係、学年を越えたつながり、家では当たり前用意されている食事などに関して、感動や感謝の気持ちが生まれてくることは、想定内だと思いますが、更に、関わった大人たちにも、無事に事業を終えたという安堵感、役に立つ喜び、そして子どもたちとの交流などから、子どもたち以上に感動と感謝の気持ちが生まれていたということです。大人たちのこの想定外の感動が、多くの機関が協力し多くの困難も伴う「通学合宿」という事業を継続していける原動力になっているのではないかと思います。（スライド p 8）

最初に伺った、自分で買った花束より、人にもらった花束のほうがうれしいという気持ちになるのは、私たちが、自分を喜ばせる力より、より他人を喜ばせる力を持っているということではないでしょうか。

最後に、連携、協働する上で重要なポイントとして、リーダーシップをとれる人が絶対的に必要だと思いました。リーダーシップとは非公式なものです。連携や協働を進める上では、

リーダーシップは、才能ではなく人として魅力を高める“真摯さ”ではないかと思います。今回取材させていただいた皆さんは、この“真摯さ”をお持ちだと感じました。これは、誰にでも身につけているものではないかと思っています。生きてきた環境により、個々に価値観があるからです。教育とは、受動的なもので、教える人と教わる人の関係性で成り立っているかと思っています。生涯学習や社会教育は自らが学びに向かう能動的な行為なのではないでしょうか。今回の取材も、苦労や障害の中に、人間関係というポイントが出てきました。今後、生涯学習の中で真摯さを学ぶ成人教育の機会を作り、連携、協働を進める上でリーダーシップを発揮できる人材の育成も必要ではないでしょうか。そして、神奈川県は「人生100歳時代の設計図」の取り組みをしています。これらの学びは、すこやかに生きるヒントにも役立っているのではないかと思います。

最後に、取材に御協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

#### ○鈴木会長

ありがとうございました。何か確認したいことがありますでしょうか。なければ、2つの事例をもとにして意見交換を行いたいと思います。今回の2事例は、市の肝いりで組織ができて活動が行われているというものでした。組織のあり方やねらい、実際の事業の進め方などについて、御意見等あれば自由に御発言ください。

#### ○野崎委員

金目小学校の通学合宿について、10年以上続いている事業で、「当たり前から感謝へ」といった成果も見られるということで、素晴らしい取組だと思いました。この事業に教員はどのように関わっているのでしょうか。

#### ○宇野委員

取材した範囲での回答となりますが、教員は、公民館への下校時の見守りを行っており、安全、安心を守るという役割を果たしているとのことでした。先生によっては、様子を見に来るということもあるようです。ただし、学校の先生が、宿泊場所である公民館の中にいると、学校の雰囲気と変わらなくなってしまうということもあるので、付かず離れずの距離感を保っているという話も伺いました。

#### ○野崎委員

地域でこのような活動を行っていくとなると、学校としては、地域に任せっぱなしという訳にはいかないだろうと思います。例えば、教員として様子を見に行くといったことも必要なのかな、と思いました。

#### ○鈴木会長

教員の多忙が言われている中で、学校としてそういうことはできるのですか。

#### ○野崎委員

確かに多忙化しており、時間的には厳しいとは思いますが、地域でこのような取組を行っていれば、顔は出したいなと思います。少なくとも、校長や教頭という立場では、地域に任せっぱなしという訳にはいかないと感じています。



#### ○鈴木会長

つまりそれは、仕事として考えるのではなく、社会人としてという意味ですね。  
他に意見ありますでしょうか。

#### ○青木委員

厚木市でも、平成 22 年から通学合宿を行っていますが、その目的は家庭生活を自分ひとりで行ってみるということなので、そこに学校の先生が入ってしまうと、おかしくなってしまう。学校と連絡は密にとりますが、学校生活とごっちゃになってしまうと意味がないので、そこは切り分けていかないといけないと思います。

#### ○野崎委員

報告された 2 つの事例について、いずれも参加者が 1 回数十名となっているようですが、これは希望制なのでしょうか、どういう形で応募して決まるのでしょうか。

#### ○天井委員

「ふくろう塾」の場合、広報については、学校と連携して行っていますが、口コミで、参加している子どもが他の子どもを連れてくるということもあるようです。ただし、この塾は、強制的に参加させるものではなく、あくまで、生徒の自主性、主体性を尊重しながら行っています。学校は広報活動など協力的に関わっているということで、連携が進んでいるといえるのではないかと思います。

#### ○宇野委員

「通学合宿」も、学校から家庭に案内を配付しています。地区には 2 つの小学校があり、各学校からの参加者が、おおむね半々程度の参加者となるようにしているとのこと。また、公民館に宿泊できる人数に上限がありますので、抽選を行っています。

#### ○小野寺委員

秦野市大根中学校区でも平成 15 年度から通学合宿を行っています。

平塚市の「通学合宿」について、PTA は関わっているのでしょうか。また、2 小学校（金目小学校、みずほ小学校）から参加とのことですが、みずほ小学校区には公民館はないのでしょうか。例えば、大根中学校区では、大根中学校、大根小学校、広畑小学校の 3 校で通学合宿を行っていますが、公民館が、広畑公民館、大根公民館で 1 年ごとに合宿場所が変わります。今回報告のあった平塚市の事例でも、みずほ小学校区にも公民館があれば、同様にできるのではないかと思います。

#### ○宇野委員

平塚市には、全 26 館の公民館があります。金目公民館は、1 館で金目小学校区、みずほ小学校区をカバーしています。

事業の企画、運営を担当している金目中学校区地域教育力ネットワーク協議会の中の「通学合宿」の運営委員会には、PTA も入っています。当日の運営にも PTA の方々が関わっています。

#### ○小野寺委員

秦野市大根中学校区の通学合宿では、幼稚園、小学校、中学校のPTAの方々が夕飯づくりのフォローを一日おきに交替で行っています。

#### ○宇野委員

夕飯については、地域団体が入って実施しています。ところで、通学合宿に参加している子どもたちは、合宿中、親の顔を見ないことが基本となっています。親が忘れ物を届けに来る際にも、子どもが学校に行っている時間に来るなど、なるべく顔を合わせないようにしているそうです。このことは、家族の側にとっても、家族の一人がいない状況を体験することによる気づきがあるというお話でした。例えば、“お姉ちゃんがないから、何でも独り占めできてうれしい”と思っていた妹が、しばらくたつと、“やっぱりさみしい”と思いはじめる、といったことがあるようです。ですので、食事の準備にも、お母さん方が関わるのではなく、地域団体の方々が行っているのではないかと思います。

#### ○小野寺委員

私も、通学合宿の食事準備の手伝いに行ったことがあるのですが、自分の子どもは参加していないのに私は参加しなければならず、自分の子どもの相手ができないという状況となり、違和感を持っていました。そういう意味でも平塚市の事例は参考になりました。ここは秦野市の通学合宿の課題でもあるのかな、と思います。

「ふくろう塾」について、主にどのような子どもが利用しているのでしょうか。また、月2回とのことですが、曜日固定だとすれば、曜日ごとに参加するグループが違うなどといったことがあるのでしょうか。

#### ○天井委員

毎回、同じような子どもたちが参加しているようです。ただし、欠席等はもちろんあると思います。また、参加している子どもたちについて、具体的にどのような子どもが参加しているといったことは聞いていないのですが、おそらくは、きわめて多様な子どもたちが参加しているのではないかと推測されます。取材では、多様な子どもたちへの対応の難しさを話されており、そういったことから、研修会などを行っているということでした。

#### ○小野寺委員

「ふくろう塾」は、夜8時までとのことですが、子どもが自分たちで帰るのでしょうか、それとも、親が迎えに来るのでしょうか。

#### ○天井委員

迎えを義務付けることはしていないとのことです。そのこともあって、参加するのは近隣の子どもたちとなります。なお、保険には加入しているとのことです。

#### ○夏井委員

事業は、継続していくことが大切ですが、金目公民館の通学合宿は15回も続いているということで、すばらしい取組だと思いました。

ところで、事業を継続していく上では、費用の問題というのが出てくると思います。「ふくろう塾」では、予算が約15万円ついていたりと、通学合宿では、参加者の負担としてお米

3合と3,300円(※)とありますが、そういった費用のあたり、どのようになっているか教えていただけますでしょうか。(※平成27年改訂)

#### ○天井委員

茅ヶ崎市の場合、まちぢから協議会の特定事業として認定されると認定事業助成金を市から受けることができます。「ふくろう塾」の場合、助成金の大部分が広報活動に使われているようです。ほか夕食支援の食材費もありますが、最近では近隣農家等からの食材の提供もあるようです。

#### ○宇野委員

(平塚市の場合、)地区の地域教育力ネットワーク協議会に対し、市教育委員会から10万円弱の予算が付くようですが、これは、協議会で行っている他の事業も含めての予算です。通学合宿のみの経費については聞いていませんが、経費に関連した話として、事業に関わるボランティアの皆さんに何か労いをしたい、という気持ちが主催者側にあるということ伺いました。ただし、それがお金ではなくて、自分が役に立っているという気持ちや、「もらい湯」の提供家庭に子どもたちから贈られる感謝のはがきなどの“つながり”となっているとのことでした。また、それがボランティアのモチベーションにもなっているようです。

#### ○鈴木会長

両事例とも、公民館については“場所の提供”となっていました。公民館は、場所だけではなく機能もあります。学校が関わると“教育の場”となってしまうといった弊害があるとの指摘がありましたが、公民館についても、関わると何か弊害があるということなのでしょうか。公民館が場所の提供だけにとどまっているのは、解せない印象がありました。公民館は地域の人々の活動の拠点になっているはずなのに、その公民館を飛び越えて、地域と学校の連携と言っているのが不思議な感じがしました。

#### ○夏井委員

公民館も連携の中に入って進めていくのが、学校と地域の連携なのかなと思います。学校と地域団体だけではなく、さまざまな人材や機能を抱えている公民館を含めた連携ができるといいな、という想いはあります。しかしながら、地域の方々が活発に活動することも社会教育の一つではあるので、そういう事例もあってよいのかなと思いました。

#### ○青木委員

厚木市の通学合宿を見ていると、公民館の全面的なバックアップがないと、とても実施できない事業です。公民館の社会教育主事が、我々(地域)の活動を全面的に支援してくれることで、我々(地域)が成長できるというところがあります。公民館が、単に場所貸しをしているだけでは、通学合宿は実施できないと思います。発表された事例でも、単なる場所貸しということではないのだらうと思います。

#### ○天井委員

「ふくろう塾」は、課題意識のもとに始められた活動です。公民館には、地域の課題を明確に捉えて活動につなげていくという役割もあると思いますので、単に場所を貸している

ということではないと思います。公民館もこの活動を確実に支えているのだと思います。

#### ○宇野委員

公民館で通学合宿をすることによって、市長や教育長が見に来るという場面があるそうです。そこで、市長から、2泊3日の最後の食事に防災用食料の賞味期限の近づいたものを提供したらどうか、という提案が出て来るなど、大人たちが化学反応を起こして新しいことが起こるといったことがあります。そのように、公民館があるからこそ、いろいろな人たちが集まるのだと思います。

#### ○鈴木会長

小沼委員、先ほど、教員が関わることの弊害について指摘がありましたが、学校としてはいかがですか。

#### ○小沼委員

確かにそうだな、と思いながら聞いていました。

金目の通学合宿のプログラムを見てみると、日曜に始まって、日曜の午後には金目中学校の理科の先生が野鳥についての話をしたとあります。この部分は、先生が、仕事ではなく“野鳥ってこんなにおもしろいんだよ”ということ伝える目的で、ボランティアで参加されたのだろうと思います。また、先生方が様子を見にくることもありますが、それ以外の部分では、学校を離れて子どもたちが活動できることが、この事業の趣旨だと思うので、それに則って、学校は静かにしているという距離感がよいのかなと思います。ですから、一つの理想的な関係で、これはこれでアリかなと思っています。

また、公民館について言えば、藤沢市では完全に地域の活動の拠点になっており、すでに成熟してきています。公民館独自で様々な活動をしており、学校はそれに、人を出したり知恵を出したりしています。公民館の重要性は今後ますます高まっていくものと思います。

#### ○大田委員

公民館の話をされてきていますが、児童・生徒という世代のときに、大人と関わっている色々な勉強をしていく、つまり学校の中だけの勉強ではなくて社会勉強していくことは、とても大切なことだと思います。それが、現在は塾やお稽古事に行ったりする時間に取り立てられてしまっていて、落ち着いて何かに取り組んだり体験したりする機会が少なくなっています。そこに、報告事例のような、公民館がしっかり機能して、子どもと大人が触れ合う場所や指導、体験、家庭の中では学べなかったことを発見する機会が提供されることは、とてもよいことだと思います。ただし、こういった取組は、地域によってその方法が異なってくると思います。地域の中で、様々な方々や団体が関わって初めて、その地域でのやり方が模索できていくのではないかと思います。

また、学校の先生方がセルフトレーニングを積むことが大切です。多くの先生は、勉強を教えることのトレーニングは受けていますが、人を育てることのトレーニングは十分でないように思います。

#### ○小池副会長

茅ヶ崎市の事例について、公民館の周辺に夜遅くまで集まっている子どもたちを何とかしたいというところからスタートした事業ということですが、子どもたちの居場所を作るということになると、学校の評価とは全く違う切り離された世界に自分の居場所があるから、安心感をもってつながることができるのだと思います。学校と地域の連携といったときに、地域の人たちによって形づくられているものが主流となって、そこに、子どもと、先生ではない地域の人たちとの信頼関係のなかで居場所ができていく、ということが理想なのではないでしょうか。連携という今回の課題を考えると、学校の関わり方はどのくらいがよいのかポイントになってくると考えます。

萩原委員は、こういったことについて学位論文を書かれていると思いますので、京都の若者の居場所の事例を引き合いに出しながら、学校と子どもたちの居場所を支える人たちとの関係というのを、どのように考えていけばよいのか、お話いただけますでしょうか。

#### ○萩原委員

私の研究は、主に中高生以上を対象としていますので、小学生だと少し違うかもしれませんが。中高生の場合、親や先生と少し距離をとったところで、第3の場所というのが大切になってくると思います。京都ユースセンターの場合は、地元のやんちゃな子どもも来れば、引きこもりがちな子どもも来る、あるいはボランティアをしたいと言ってくる子など様々でしたが、学校の先生たちは、外からは見るが中には入らないという距離感を持っています。また、センターからも学校の側には報告しないというのが暗黙の了解となっています。横浜でも、「よこはまユース」という公益財団法人が、桜木町で中高生の居場所となるようなところを運営しています。地元の先生たちにとっては、学校だけではケアしきれない子どもたちを、そういう場所で別の大人やスタッフが見てくれるというのはありがたいという信頼関係、住み分けができています。先ほど、校長先生の委員から、地域にやっていただいているので、学校としては、感謝と申し訳なさもあって顔を出さないわけにはいかないというお話がありましたが、学校が抱えすぎてしまうことはよくないと思います。やはり、教師と生徒ではない関係性が必要となります。地域のおじさん、おばさん、お兄さん、お姉さんといった多様な他者、多様な縦、横、斜めの関係性が豊かにあるような場が重要です。学校がどれだけ地域を信頼して委ねることができるか、手を離す勇気がとても大事だと思います。

#### ○天井委員

「ふくろう塾」の事例では、時折校長先生等が見に来られることもあるようですが、校長先生が来ると子どもたちの態度が変わってしまうということがあるので、なるべく、地域の方々のお一人といった感じで対応しているそうです。そのように、学校との連携について配慮はされていますので、無関係ではありません。一方、学校との情報共有については、子どもを育てると同じ目的で取り組んでいるわけですから、しっかり協働してやっていくべきではないかと思います。また、学校は、地域の活動に対して、積極的に表面に出なくともしっかり関わっているという関係性が重要ではないかと思います。

#### ○小林委員

公民館は、地域の様々な世代の人たちが気軽に行ける場所です。また、遠くに出かけるのが困難な高齢者にとっては、地域の公民館が交流の場所となっていたりするので、近年は、利用者が増えているのではないかと思います。

「通学合宿」について、資料に「通学合宿は、工夫次第で様々な展開が可能である。ともすれば社会への参加意識が低いといわれる中・高校生についても、子どもたちの先輩世代として一定の役割を与え、参加・協力してもらうことによって、彼らの目が地域に向く契機となったり…」という記載がありました。これは、肝になるところだと思います。

私たちは防災について取組を行っていますが、そこでは小学生や中学生が活躍してくれています。東日本大震災や熊本の震災でも、小学生や中学生の活躍を伝え聞いているところです。特に中学生は、大人の心と子どもの心の両方を持っていて、防災の観点では非常に注目されている世代だと思います。通学合宿までいなくても、体育館に一晩宿泊する避難所体験などに展開可能なのではないかと思います。

#### ○有賀委員

通学合宿は、子どもの目線に立つと、合宿に行っている子どもたちと、行っていない子どもたちとの温度差があるだろうと思われることが気になりました。なるべく多くの子どもたちが参加できる体制ができるとういのかと思います。

また、2つの事例を通じて、公民館の使い方、役割がいろいろあることが分かりました。

#### ○田中委員

母校の小学校の放課後児童クラブは、私の保護者世代が立ち上げたもので、横浜市においても先進的な事例でした。この放課後児童クラブにより、小学校では子どもたちを保護者目線で面倒見てくれますが、中学校にあがると、急にそういう体制がなくなってしまいます。そこで、中学校版の放課後児童クラブのようなものがないか、という意見がありました。「ふくろう塾」の事例では、公民館周辺に夜遅くまで集まっている中学生への対応が課題としてあったということでしたが、どこの町でも同じようなことはあって、“小学校まではあんなにいい子だったのに、中学校に行って手を離れたら、どうしてあんな風になってしまったのだろう。私たちの手に取り戻したい。私たちがもう少し関わっていれば、彼らの人生は変わったかもしれない”という思いからの意見だと思います。

これに対する横浜市の回答としては、中学生は、勉強やお稽古事などで忙しいので、今のところ、中学生版の放課後児童クラブのようなものは設置していない、ということでした。それも一理あるかな、とは思いますが、「ふくろう塾」の学習支援などの取組は参考になりました。同じような思いを持っている現場は多いのではないかと思います。

「通学合宿」について、この元祖といえる、キャンプ等の共同生活を通して子どもの教育を行っていかうという思想を持っているのはボーイスカウトなのではないかと思います。そういった意味では、もし民間の力を借りるとすると、ボーイスカウトの人たちの意見なども聞いてみると、面白いことができるのかなと思います。また「もらい湯」は、心がつながる取組として非常に参考になりました。

## (2) レポートの作成について

### ○鈴木会長

これまで6件の事例報告をしていただきました。今期の審議会は、部会の人たちに調査等を行ってもらって、それを事務局が論文のような形にまとめるというスタイルはやめましょう、と前回提案し、その通りの形で進んできているところです。ついては、各委員が文書を作成してみて、そこから答申を作成していこう、と前回了解いただいたところです。そこで、今回「レポートの作成」ということで資料を作っておりますので、事務局から説明願います。

### ○事務局

お手元「資料3」を御覧下さい。

これまで、計6件の事例発表をしていただきました。それを踏まえて、各委員の皆さんの所見や考察をまとめていただければ、というお願いとなります。テーマは「地域と学校の連携・協働をすすめるために」とし、タイトルは各自、内容に沿ったものを御自由にお付けください。また、レポート作成にあたっては(a) 地域と学校の連携・協働に期待すること (b) 連携・協働をすすめる上での課題と方策 (c) 今後の展望と方向性など、を観点としてまとめてください。なお、発表された6事例を踏まえてとしておりますが、委員の皆さんがそれぞれに関わられたことのある事例などもあるかと思っておりますので、それらを参考として書いていただいても構いません。作成いただいたレポートを、今後どのようにしていくか具体的には決まっておりますませんが、いずれにせよ、なんらかの形で答申に反映していくこととなりますので、御承知おきください。形式等は資料に記載のとおりです。

### ○鈴木会長

論文を執筆するわけではありませんし、答申では、我々の経験に基づいた提言をしていきたいと考えておりますので、どこかの資料に掲載されたものなどを調べてまとめるということではなく、この審議会での話や、御自身の身の回りの事例などを中心として、個人の意見をお書きください。このレポートをどういう風に使うかは、改めて委員の皆さんに御相談したいと思っております。

## (3) その他

### ○事務局

本年中の審議会は、今回が最後となりました。次回は既に日程が決まっており、平成30年1月19日(金曜日)、会場はかながわ県民センターの予定となっております。御予定いただければ幸いです。次回は、皆さんからお出しいただくレポートを踏まえながら、答申の構成や方向性等について検討していく予定です。

### ○鈴木会長

それでは、本日の審議を終了いたします。進行を事務局に返します。

## 4 その他

## 5 閉会

(了)